

それは五歳から始まった……

庶民文化研究所所長に聞く

何を隠そう、小誌は言わずと知れた庶民誌である。
ゆえに庶民文化研究は、ときに小誌の使命でもある。
編集部が師と仰ぐ庶民文化研究の大家、
町田忍さんの全仕事の解明に挑戦してみた。

庶民文化研究家
町田 忍

●まちだ・しのぶ 1950年東京都生まれ。警視庁勤務の経験がある。近著に『銭湯「浮世の垢」も落とす庶民の社交場』（ミネルヴァ書房）、『戦後新聞広告図鑑』（小社刊）などがある。

モノ集めの原点

——町田さんは庶民文化研究の大家です。「庶民文化研究所」も設立されています。まずは研究所長になるまでを聞かせてください。
なるまで……？。いつの間にかなつちやったんですよ。
——なつちやったんですか（笑）。

なつちやったんです。小さいころから個人的にいろいろなものを集めてきたんだけど、ある時期からコレクションに関する取材を受ける機会が増えてきて。
コレクションしているものもチョコレートや納豆や家庭常備薬のパッケージとか、銭湯に関連するものとかマンホールの写真とかエアラインのゲロ袋（エチケット袋）とか、とに

かく、いろいろだから、これらを総称できる言葉が何かないかなと考えていたんです。で、庶民文化にしておくても当てはまるなと思って、「庶民文化研究所」にしたと。いまから二十年前ぐらいですね。
——コレクションの対象はどのくらいあるのですか？
項目としては百五十種類ぐらいです。いちばん初めに集め始めたの

がチョコレートのパッケージです。昭和三十年ごろからだから、年齢でいうと五歳のときから集めています。
——五歳！ 年季が入ってますねえ。

親からしたら「こんなくだらないもの」扱いですよ。勝手に捨てられたりはしなかつたんですか？
何回かありましたよ。シヨックだったのが昭和三十三年の創刊からためておいた『少年サンデー』を捨てられてしまったときですね。適当に山積みしておいたら、知らないうちに捨てられちゃって、そこで「これはマズイ。自分でしっかり管理しとかないと親に捨てられちゃうぞ」と気づいた。以来、パッケージにしても何にしても、集めたものはちゃんと分類整理して保管するようになりました。親もやがて、よく言えば理解、実態はあきらめて放っておいてくれるようになって。

集めたというより、正確には捨てられなかつたんですよ。チョコレートは高級品でめつたに食べられないお菓子だったから、包み紙すら捨てるのがもつたいたなくて。ふだん食べているお菓子といえば駄菓子屋のものですから、チョコレートは高級品ですよ。当時は、戦後の復興が一段落して、さまざまな新商品がドツと出てきた時代なんです。チョコレートもそうだし、インスタントコーヒーやインスタントラーメンもそう。出始めてはきたけれど、値段が高くてなかなか買えなかつた。だから手に入るとパッケージも空きビンも、捨てられず大事にとっておいたと。

親からしてもコレクションや研

究の対象は膨大です。パッケージだけでなくチョコレート、納豆、蚊取り線香、正露丸、歯磨き粉、徳用マッチ、ゲロ袋、バナナのシール、箸袋……。そこに飲料缶や食糧缶、街の風景・風俗や建築物、看板・ポスターの写真、鉄道や車両の写真なども加わるわけで……。

集め始めたのが早かつたですから、でも僕のコレクションが日の目を見たのは、昭和が終わったあたりからで、それまでは夜な夜な広げては一人で楽しんでいた。

——注目を浴びたのが「銭湯」の研究。いまや銭湯研究の第一人者として知られています。

銭湯に興味を持ったのは、外国人の友人に「銭湯はなんでお寺みたいな形をしているのか」と聞かれたことがきっかけなんです。「確かにそうだな」と思って銭湯建築に興味があ

銭湯でブレイク

町田少年にとって宝物でも、

それにしてもコレクションや研